

市政研究所だより No.2

豊中市政研究所 TIMR(The Toyonaka Institute for Municipal Research)

〒561-0802 大阪府豊中市曾根東町 3-7-1 TEL:06(862)2290 FAX:06(862)2292



News 平成10年度(1998年度)事業計画が理事会で承認

4月25日、研究所内で平成10年度(1998年度)第一回理事会を開き、平成10年度事業計画案・予算案が、原案どおり承認されました。

本年度の事業計画は以下の通り

1. 調査研究事業として、豊中市の都市問題を中長期的な視点から基礎的・総合的に調査研究
2. データバンク事業として、当研究所が収集した各種の文献、行政資料の収集・整理
3. 広報出版事業として、機関紙『TOYONAKAビジ

ョン22』の発行、秋には講演会の開催、ホームページの開設、年4回のニュースレターで研究所の活動内容、成果を発信

4. 人材育成として、研究員が各種シンポジウムや講習会へ参加

予算総額は、51,585千円で、前年度比12.8%増。増額の内訳は主に研究員増員(1名)、調査研究費の増です。

■主な事業計画

(1)データバンク

今年度は、その整理分類と検索、アクセス方法を確立する予定ですが、手始めとして、まずは近日発行の機関誌創刊号で定期購読誌、一般図書、辞典、政府刊行物等のリストを掲載します。

(2)セミナーの開催

豊中市の取り組むべき課題について闊達に議論する場として、市政研が主催する勉強会です。初回は、大久保理事長に昨年秋の講演会「静かな革命」の続編をお願いしています。日時、会場等詳細が決まり次第お知らせいたします。

(3)ニュースレターの発行

市政研究所の事業の紹介、お知らせ、研究活動の近況報告、データバンクの更新状況等を「市政研究所だより」として発行します。

(4)ホームページを開設

「市政研究所って何をやっているところ?どこにあるの?」「うむー…!?!」市政研究所の活動は、ニュースレターや機関誌の発行などをおして、できるだけたくさんの方々に伝えていきたいと考えています。さらに、今年度はコミュニケーション手段の一つとして、ホーム

ページを開設します。ここでは、研究報告や文献リストなどお役立ち情報を提供したり、ネット討論会など可能な限り開かれたページにしていきます。

運用開始は来春です。ご期待ください。

(5)『TOYONAKA ビジョン22』近日創刊!!

豊中市政研究所の機関誌「TOYONAKA ビジョン22」が間もなく創刊されます。

ビジョンとは未来像を描くこと。100年(22世紀)向こうにいる将来世代のことも考えながら、今、どう物事を捉え、行動に移すせばいいのか…。ローカルな豊中から発信されたビジョンは、少しずつ共有の輪が広がってやがて大きなうねりになって実現化する…。

この機関誌は、研究者や専門家などから豊中市に関する都市問題について論文を寄稿してもらい、新たな公共政策を作成する上で、今後の指針を明らかにしようとするものです。創刊号の特集テーマは、「都市自治体運営と政策形成～その課題と展望～」です。

創刊号では、新しい世紀にふさわしい都市自治体運営とは何か、その基礎となる政策形成の課題と展望について探ってみます。

研究員 Report

平成9年度の調査研究を終えて

昨年度の共同研究を契機に「広域連携」について考えてみました。地方分権の受け皿論、行財政改革などを背景に、活発に議論を呼んでいるテーマです。制度論的には『広域行政』として、いくつかの仕組みが確立しています。と言っても、現在地方分権と地方制度改革という動きの中で制度充実の方向での議論がなされているのですが…。『広域連携』という場合にはもう少し広い概念で捉えているようで、「農業生産・流通」「生活環境（福祉・医療）整備」「環境保全対策」「交流（自然・文化）事業」などの分野で、①近隣市町村が提携 ②遠隔の市町村と連携 ③大都市との連携という類型で、4つのメリット（スケール、スコープ、ネットワーク、コンセプト）を目標にしていると整理しました。

結論的には、「『事実上の協議会』方式を中心に、アドホックに、全方位的に、市民をはじ

めとする多様なアクターとの関係づくりに留意しながら進めることが望ましい」という常識的なものに止まってしまったのですが、積み残された問題として、以下の諸点を問題意識として継続していきたいと考えています。

- ①基本的な視点としては、公的サービスと行政のユーザーである市民のコントロールがより強化される方向で、「広域の行政」と「狭域の行政」を並立的に考えることが重要。
- ②ワンセット完結主義型自治体運営方式の限界は明らかになっている。
- ③広域行政制度改革は、約3,200の基礎自治体全体を画一的に縛るような方向では進めないだろう。また、その改革には、原点に溯る歴史的事実を踏まえた、地方制度全体のデザイン設計が必要。
- ④豊中市にとっての広域連携は、大阪市との関係を省いては、空疎なものとなる。

(室木)

豊中市における地域コミュニティ組織に関する基礎調査

阪神・淡路大震災を契機に、地域社会で公益的な活動をする市民組織ないしはネットワークが注目されています。最近の市民意識調査やデータによると、地縁をベースにしたコミュニティ（自治会・町内会）の組織率は低下する一方で、テーマを明確にしたボランティア組織への関心は高まる傾向にあります。

今回の調査研究は、「様々な地域コミュニティ組織の自律とネットワークがそれぞれの組織を活性化させ、引いてはまちを活性化させる原動力となる」との仮定のもとに、改めてコミュニティ組織の実体に迫ってみたいと思います。

具体的には、①豊中市における地域のコミュニティ組織を従来の自治会組織のみならずボランティア組織も対象に入れ、②現状のコミュニティ組織の機能・活動の実態、組織運営上の問

題などを抽出し、③地域コミュニティ組織が自律的に発展していくために、将来、何が求められようとしているのか、を明らかにしていきたいと考えています。

去る5月14日（木）には、大阪女子大学の井上真理子さんと帝塚山大学の中川幾郎さんにメンバーとして加わっていただき、第1回目の研究会を開きました。今年度は既存の文献や資料にとどまらず、アンケートやヒアリングの手法を加えながら、できるだけフィールドに出て“生きた声・データ”がかき集められるようにと、現在仕込み期間中といったところです。蝉が鳴き始める頃には、これを読んでいらっしゃる方々にもお伺いするかもしれません。ご協力お願いします。

(本荘)

論文紹介

市政研究所での研究の組み立てを検討している最中に、興味深い調査報告に出会いましたので、その要約を紹介いたします。

「人口・家族変動と都市・地域計画の基本枠組みの再検討」

厚生省人口問題研究所 大江守之
『都市計画』No.199 (1996年) 所収

- わが国の人口は2010年頃にピークを迎え、いずれはほとんどの市町村が人口減少状態になる。そこでは人口増あるいは横ばいという計画人口フレームの設定では、政策の優先順位を見極める障害となるおそれが高まる。
- 高齢人口とそれ以外の人口との間の受益と負担の関係を考える際には高齢化率は重要であるが、都市・地域計画、それもミクロな単位になるほど高齢者の絶対数が重要になる。
- 「物語」を語るには、大きく変化する社会経済変動に対する的確な見通しが重要である。

(物語例)

- ① 少子化議論がさかんであるが、21世紀初頭にかけて第二次ベビーブームが出産年齢に達するため、出生数は確実に増加する。母親が働くようになる中で、この子ども達を受け止めるキャパシティとシステムを見込んでおく必要がある。
- ② 高齢化の向こうに我々は多くの死に立ち会う社会へ入っていく。その死は都市で発生する割合が高くなり、故郷との縁は薄く、寺・檀家関係も弱く、子、兄弟も少なくなるというように、死を取り巻く状況も大きく変わる。否応なく地域での新たな受けとめ方の模索に迫られる。
- ③ 高齢者の絶対数に加え、(単身、独居などの) 家族的属性以外の属性も変化する。20~30年後の高齢者は、高学歴化、第2、3次産業の就業経験者が多数を占める。ゲートボールや入浴や和室での踊りで満足することなく、より多様で選択性の高い行動パターンをとる可能性が高い。

要約文責：藤家

Date Bank

- 今後、データバンクの利用方法、更新状況をこのコーナーでお知らせします。毎回チェックして下さい。
- データバンク事業は市政研究所に課せられた機能の一つの柱です。従って、研究所の研究活動のためだけでなく、豊中市の政策づくりに携わる人たちのデータバンクです。こんな機能をぜひ…といった声をお聞かせ下さい。
- インターネットにも接続していますので各方面のホームページをはじめ、インターネット上で公開されている情報へのアクセスが可能です。気軽に情報検索にお越し下さい。

※現在の所蔵状況

市発行物	約 2,600点
定期購読誌	約 1,000点
図書	約 650点

政策研究所連絡会

マッセ大阪を窓口にして昨年11月大阪府下市町村の市政研究所や研究会の相互連携をはかる「市町村政策研究所連絡会」が発足、2月に第1回、4月に第2回連絡会が開かれました。府下には、堺・豊中・岸和田・東大阪・八尾の5市の政策研究所等がありますが、財団あり、任意団体あり、行政内部・外部の組織があるなど発足形態・時期などばらばら。この4月の会合では10年度の事業計画を中心とした報告と、当面2ヵ月に1回の情報交換をすること、各研究所主催の公演・シンポジウムに集まることなどを決定

■ 市政研究所の新しいスタッフです

川手（事務局長）

3月31日市役所退職、『4月1日豊中市政研究所〇〇〇に嘱託する』と大久保理事長から辞令をいただく。早速2時間の講義がある。「学校—地域共同体—家庭」の三角形、「学ぶ（learning）—研究する（researching）—教える（teaching）」の三角形、「知育—体育—徳育」の三角形etc。次々と並ぶ三角形（安定形とか）を図示しての研究所のあり方の説明。これで頭が混乱し、私の仕事とはたと困惑する。まずは有馬先輩を見習いぼちぼちゆくか。

藤家（研究員）

「少し距離を置くと、客観的に見ることが出来る。」と背中を押されて研究所にやって来ました。確かにそんな気もしますし、逆に距離を置きすぎると見えなくなりそうです。豊中市の政策形成に向けて中長期的な視点から調査研究するという事は、他都市の取り組みや社会全体の流れはもちろんですが、市内の現場からの発想にも、そのヒントがあふれていると思います。迷路に入り込まないように客観的な目からご支援下さい。

Letter

今年3月末日をもって退職された有馬郁雄さん（前事務局長）から市政研究所へ激励のメールが届きましたので紹介します。

がんばれ・豊中市政研究所

市政研究所は4月から新事務局長のもと研究体制の充実がはかられ、2年目の活動が開始されています。

いくつかの研究が真摯に取り組まれている事と思います。期待しています。

私にとって豊中市は住み心地のよい街で不足はないのですが、高齢・少子化時代を真近にして地域に住んでいる人達がさらに心の通いあえる街づくりの研究も「将来の課題として」お願いしたいなと思っています。がんばってください。（有馬）

有馬郁雄 様へ

「豊中市政研究所」設立の緊張を背に研究所の役割、機能、運営などを議論し始めて1年。研究所を去られることになって、改めて寂しさを感じています。

事務局長としての職務に加えて、渉外や総務を担っていただきましたが、事ある毎に豊中市への、そして研究所へのロマン、そして家族への愛・絆を語られていたことを懐かしく思い出しています。

お体を大切に、念願のハッピー・リタイアメントを迎えられるよう、この場を借りてお祈り致します。（市政研究所一同）

事務局から

▶いつでもホットなコーヒーが飲めますよ、というキャッチフレーズを研究所から発信します。▶地方自治関連の図書、雑誌類も整ってきましたが、分類と目録、配架は未だの感がありますが、何とか知恵を出し合って、決めなければと思っている。研究員が増員され、研究体制が整った。こうなると成果といわれるが、研究活動はじっくり取り組むというのがこの方針。▶まずは研究所への足を運んで下さいませんか。（川手）

皆さん、もうすぐ夏です。私にとって夏と言えば海外旅行です。毎年私が海外へ旅行するのはちょっとした訳があります。

あれは数年前のこと、抜けるような青い色をしたオーストラリアの海に、なんだか吸い込まれてしまいそうで、うっとりしてしまいました。そして私はブルーの瞳にも、とても弱い。あの瞳のブルーと青い海が私の中で区別がつかない。青い瞳を見ると、身動きがとれなくなり、声が出なくなってしまふ。まるで、恋におちたかのように。海外旅行を何回重ねても、一向に慣れる気配がない。旅行の度に私は恋におちている。ブルーの瞳におちない方法を探しながらも、「まずは、慣れ・親しむことだ！」を理由に、今年も行って来ます。（水田）